

ちがいを越えて

(ローマ14・1〜12)

一、「信仰の弱い人」

14章1節に「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。」とあります。教会生活に入りますと、教会員の中にかつちりしている方がいることを体験するでありましょう。毎週の主日礼拝を欠かすことなく出席し、信仰生活を保っている。収入の十分の一を聖別して神に献げる。そういう方がおられることによつて、どの教会も支えられています。これは神の前に感謝するべき事です。ですが、そういう熱心な方が人に対して厳しくなり、次のように言うようになつたらいかがでしょうか。「あの人は礼拝をしばしば休んでいる。よろしくない」と。ひいては「毎週礼拝に来ないのはキリスト者としてふさわしくない」と語るようになったら、いかがでしょうか。そのように語る教会員は「強い人」なのでしょうか。世の中の基準で考えるなら「強い人」です。ですが、使徒パウロが語る言葉によれば、そういう「〇〇でなければならぬ」と思つたり、語つたりする信者は「信仰の弱い人」なのです。

では「信仰の弱い人」が、どういう人なのかについて、その先を読んで教え

られたと思います。2節です。「何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかに食べません。」とあります。ローマにありました家々の教会に属する教会員たちは、おそらく、少数のユダヤ人キリスト者と多数の異邦人キリスト者から成つていたと思われまふ。ユダヤ人キリスト者は、主イエス・キリストを信じて救いに与つたとはいうものの、ユダヤ教徒であつた頃のしきたりに縛られていました。反対に、異邦人であつてキリストを信じた人たちは、そのようなしがらみに縛られていません。すなわち、パウロが言う「強い者」でした。異邦人キリスト者から見ると、キリストを信じた後もユダヤ教的なしがらみに縛られているユダヤ人キリスト者を見て、歯がゆい思いをしたのでありましょう。逆に、ユダヤ人キリスト者が異邦人キリスト者を見ると、とんでもない人たちに見えたことでありましょう。当然のこと、神の家族とされた教会の中にトラブルが発生します。「強い者」が「信仰の弱い人」を軽蔑し、「信仰の弱い人」が「強い者」を裁きました。

二、受け入れる

では、「強い者」が「信仰の弱い人」を受け入れる、また「信仰の弱い人」が「強い者」を裁いてはならない理由は何なのでしようか。それは、3節後半に

書かれています。「神がその人を受け入れてくださったからです。」がそうです。神がイエス・キリストにあつて「信仰の弱い人」を受け入れておられるからです。「〇〇でなければならぬ」と考えている方も、神は受け入れておられます。これまで述べたことは、決してひとつごとではありません。と言いますのは、どこの教会にも「〇〇でなければならぬ」と考えている方が一定数は居るからです。皆様は「〇〇でなければならぬ」と考える、パウロの言う「信仰の弱い人」でしようか。それとも、少しいかがげんな、いわゆる「強い者」でしようか。

ちなみに、「私は主イエスを信じているから、礼拝に行くことには縛られていませんよ」と言う方がおられたらいかがでしようか。そういう方は「強い者」でしようか。それとも、「信仰の弱い人」でしようか。「毎週礼拝に来ないのはキリスト者としてふさわしくない」と考える「信仰の弱い人」と正反対のようですが、実はこういう人も、神を信じているところを出発点としているのではなく、自分の考え方を前面に押し出す「信仰の弱い人」となります。もしそういう方が身近にいたら、そういう人をも「受け入れなさい。その考えを批判してはならない」が、パウロの解き明かしている福音の言葉になります。

三、主が立たせてくださる

さらにパウロは語ります。4節です。「あなたはいつたいたれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」と。「他人」とは、だれのことでしょうか。あるいは「他人のしもべ」とは、だれのことなのでしょうか。「他人」は、神さまを指しています。そして「他人のしもべ」は、神のしもべたち、すなわち教会員を指します。パウロがこのように語つたのは、当時はそれぞれの家にもべがいたからです。その場合、しもべは家族の一員のようになつて、家で働いていました。パウロは、その形を教会になぞらえて語っています。「信仰の弱い人」も「強い者」も、神のしもべです。自分の前にいる教会員は、自分のしもべではなく、神のしもべです。相手のしもべではなく神のしもべです。ならば、互いに神のしもべを軽蔑したり、裁いたりするのはまちがいです。私共がなすべきは、受け入れ、ひたすら祈ることです。

今私共が決断する小さなことが、やがて大きなちがひとなり、ある人は後悔するでしょうし、別の方は大きな感謝に導かれることでありましょう。